

## 後記

本『跡見花蹊日記』の編纂事業は、山崎一穎学長の下、昭和五十九年に、大学の二十周年記念事業として計画され、その作業を開始した。しかしながら、テキストの難読に加えて、担当者の退職また逝去が相次ぎ、体制不備のまま、作業は難航し、解読は遅々として進まなかった。

平成七年、飯島周学長の下に、体制が組み直され、岩田秀行が担当者となり、青木茂、和田英道両教授とともに、改めて作業を進めることとなった。しかるに、平成九年一月に、和田教授が他界され、青木教授および岩田の二名体制となり、さらに平成九年三月には、青木教授も退職され、ついには岩田一人で作業を進めざるを得ない状況となった。しかしながら、青木教授は退職後も岩田と分担して他者のし残した担当分をも含めて解読を進めくんだり、平成十二年三月、すべての下読み原稿が揃い、出版に向けての基礎作業を終えた。そして、日記は改めて、学園の百三十周年記念事業として出版されることとなった。

平成十四年六月、第二次山崎一穎学長の下、花蹊日記出版に向けての編集委員会が発足し、岩田が編輯責任者となつて、小池章太郎教授と共に編集作業を始め、改めて入稿用本文の作成に取り掛かった。先回の轍を踏まぬため、作業は個人作業とはせず、すべて寄り集まつての読み合わせ作業とした。しかし、厩大な本文量と相俟つて、まちまちであった翻訳形式の統一また誤読の訂正に多大の時間を要し、読み合わせ作業は三年間、総計三百四十六回に及んだ。そして、平成十七年七月、最後のチェックが終わり、すべての原稿を入稿にこぎつけた。

難読極まる本文をこのような形になし得たのは、ひとえに小池章太郎教授および補助作業員の氣多恵子氏のお力による物である。またこの間、櫻井彩氏（跡見学園中等学校講師）は、コンピュータに向かつての入力作業、訂正作業に鋭意専心してくださった。

口絵に関しては、編集作業中、北澤憲昭教授に美術的視点から種々のご助力をいただき、また漢文訓読については、岩本憲司教授にご教示を得た。

平成十六年五月、最初の原稿を入稿後は、角川学芸出版編集部の中野一夫氏から、唐沢満弥子氏にお世話になった。叮嚀な校正作業により、多くの問題点が発見され、本文の正確性が高まった。東京書籍印刷所は、煩瑣な組み版に、適切な技術力をもって誠実に対応くださった。

日記の編集作業全体をとおして、跡見学園史料編纂室の中野一夫氏からは、資料提供と種々のご教示をいただいた。平成十四年以降、編集作業には跡見学園女子大学図書館の全面的な協力を得、作業は飛躍的に進捗した。豊島美紀前図書課長、長谷川久子現図書課長には、日記原本の保管・出納をお願いした。さらに、編集作業中は、跡見学園女子大学花蹊記念資料館からも協力を仰ぎ、資料の調査に関し、渡辺泉学芸員の協力を得た。

なお特に、御家蔵資料掲載の許可をくださった、花蹊の母の出里寺田善左衛門家の後裔寺田静雄氏、波多野華涯の曾孫小田切マリ氏に、心より御礼を申し述べたい。花蹊日記出版の意義をご理解くださり、貴重な伝来資料の利用を快諾くださったのみならず、資料の撮影また情報提供に全面的にご協力くださり、常に暖かいご配慮を賜った。両氏のご高配により、新出資料を以って巻頭を飾り、本日記の資料性を豊かにし得た。

編集は、日記の本文をできる限り正確に、またありのままに伝えることをその基本方針

とした。本日記が様々な分野で多くの人々に利用されることを願って已まない。

平成十七年十一月九日

花蹊日記編集委員会 座長 岩田秀行

花蹊日記編集委員会

座長 岩田 秀行  
委員 小池章太郎

補助 氣多 恵子  
櫻井 彩

礎稿作製 青木 茂 (平成九年三月退職)

岩田 秀行

和田 英道 (平成九年一月逝去)

柴田 光彦 (平成十三年三月退職)

伊藤 嘉夫 (昭和五十九年のみ)

補助 永木 伸枝

小沢 詠美子

鏡味 貴美子

金田 房子

三浦 裕子

高垣 亜矢

渡辺 芙美

協力 北澤 憲昭

資料提供 寺田 静雄

小田切マリ

資料提供 跡見学園中高等学校

跡見学園史料編纂室

跡見学園女子大学花蹊記念資料館

跡見学園女子大学図書館

協力 東京都写真美術館

なお、本資料には現代から見て不適切と思われる表現箇所が見受けられる。出版者としても決してそれを容認するものではないが、歴史資料としての価値に鑑み、原文を改めたり削除したりすることなく、ありのままに提供することとした。

学校法人跡見学園